

若手技術者を取り込み 工場を継続させるには

業界・社会の人手不足

今や社会問題となっている出生率の低下と、それによる少子高齢化。その中でも、钣金塗装業界は特に深刻な人材不足に直面している。熟練技術者の高齢化が進む一方で、その技術を受け継ぐべき次世代の若手が圧倒的に不足している。このままでは、どれほど高度な技術を持つ工場であっても、数年、十数年後には後継者・人手不足による「廃業」を余儀なくされる危機に瀕している。

このような状況下で希望の星となるのが現在、自動車整備専門学校で学んでいる学生たち。しかし、経営者の中には「今の若者は採用してもすぐに辞めてしまう」や、「手取り足取り教える余裕など現場にはない」、「未経験の20歳代は不要。即戦力の中経験者がほしい」と感じている人も少なくないだろう。決して安くはない、顧客の大切な車を預かり、日々の業務で忙しい経営者としては、即戦力を求めるのは当然だ。

しかし、慢性的な人手不足の今、他社で育った「優秀な即戦力」に、都合良く自社に来てもらうのは正直難しいと言わざるを得ない。そして、今いる頼もしい技術者たちも、いつかは必ず引退の日を迎える。「若手は不要」、「育てる余裕はない」と言い続けることは自社の首を締めるに等しいのだ。

若手を採用するメリットとは

あえて時間と手間のかかる未経験の20歳代のスタッフを採用し、育てる必要はあるのか。20歳代の採用は単に「労働力の確保」だけにとどまらない。

特定整備への対応など、現場で求められる知識と技術は、かつてないスピードで高度化・複雑化している。若者たちは、これまでもスマートフォンやタブレットといったITツールと、流行のアプリを即使用する文化が常に身近にあり、慣れ親しんできたため、こうした新しいテクノロジーやデジタルツールへの順応も早いという大きな強みを持つ。彼らを採用し育て上げることは、これから待ち受ける高度な整備技術を要する時代を勝ち残るために不可欠なピースとなる。

若手の本音とは

しかし、ここで立ちほだかるのが「世代間の大きな壁」、つまりジェネレーションギャップだ。現在、钣金塗装工場のスタッフのボリューム層は40～50歳代。「技は師匠の背中を見て盗むもの」、「多少の理不尽は気合と根性で乗り越える」といった価値観が残っている世代かもしれない。

一方で、現代の20歳代はまったく異なる価値観の中で育っている。彼らの多くが就職先に求めているものは何なのか。この価値観の違いを無視したまま「昔はこうだった」、「俺たちの若いころはもっと苦労した」という過去の基準で接してしまえば、そこには「すれ違い」が生じてしまう。車離れ、さ



らに「きつい・汚い・給料が安い」のいわゆる3Kの職種を敬遠していると言われる若者だが、本当に彼らは自動車業界に関心がないのだろうか。それとも、職場が彼らの「働きたくなる条件」を提示できていないだけなのだろうか。

本特集では、「人材採用のすれ違いと本音」と題し、車体修理業界が若手からも選ばれるためのヒントを探る。自動車整備専門学校の学生へのアンケート結果からは、現代の若者が就職先に求める「理想と条件」、さらにその条件へ钣金塗装工場が歩み寄るための策を提案した。また、車体整備を専攻する学生とその教員へのインタビュー、実際に新卒・若手採用を成功させ、人材の獲得と育成に向けて創意工夫を凝らしている工場事例及び経営者の声を紹介する。

本特集を通じて、ぜひ若者の本音と向き合い、そして、採用に前向きになってもらえるとうれしい。

・調査対象：車体整備士を目指す学生258人（うち留学生2人）

・調査方法：Webアンケート

・調査期間：2026年4月15日～5月15日

・協力校

岡山科学技術専門学校 / 関東工業自動車大学校 / 久留米自動車工科大学校 / 群馬自動車大学校 / 埼玉自動車大学校 / 静岡工科自動車大学校 / 中央自動車大学校 / トヨタ神戸自動車大学校 / トヨタ東京自動車大学校 / 中日本自動車短期大学 / 新潟国際自動車大学校 / 日本工科大学校 / 日本自動車大学校

関東工業自動車大学校 (埼玉県鴻巣市)

授業の8割が実習の圧倒的な現場主義 業界を担う学生を確実に第一志望へ

国家資格取得率、そして第一志望への就職決定率100%を誇る。授業の8割を実習に当てることで実践的なスキルを身に付けさせて、学生の進路に寄り添い幅広いキャリアへ導いていく校風が特徴。



教員

諸田 和也

教務部 サブマネージャー
・担当学科 車体整備科
・教員歴 19年



関東工業自動車大学校は一級自動車整備士の養成を核としながら、学生が最先端技術を持ち、業界の未来を担う技術者となるよう実技重視の教育環境を提供している。そして同校は就職希望者に対して100%という高い就職率を維持しており、通じて学生一人ひとりの状況に応じたキャリアの提案と就職支援を行っている。

同校の教員であり、ディーラーでの現場経験を持つ諸田和也氏が最も危惧しているのは、学生が周囲の動きに流され、自身のビジョンを持たないまま就職先を決めてしまうことだ。年度初めにディーラーから求人票が届き、そこで進路を早々に固める学生も多い。「焦りからすぐに決めてしまう生徒も少なくない。追って専門工場の求人もあるので慌てなくていいと繰り返し指導している」。

専門工場に対しても、厳しい現状認識と要望を持つ。ディーラーに比べ求人への動きが遅く、ぎりぎりまで採用可否が判断されない場合もあり、学生の選択肢を狭める要因となっているという。「求人票が9月ころに出てくることが多いが、それでは遅い」と訴える。現代の若者は受け身になりがちで企業側からの積極的なアピールや説明会開催など接点を持つための先行投資が必要不可欠だと説く。「当校では授業時間を使って希望する工場の企業説明会を催すこともある。ぜひ活用してほしい」。

昨今暗いニュースが業界を覆い不安を抱える学生も多いというが、諸田氏は悲観していない。「どんな素材、形になろうと钣金塗装はなくなる仕事だ」と車体整備の将来性に太鼓判を押す。未来を見据えた先行投資として、じっくりと若い技術者を育てる環境が業界全体に求められていると、力強くエールを送る。

学生

渡邊 公輔

3年 / 車体整備科



国家公務員の事務職から自動車整備の世界へ。渡邊公輔さんは、そんな異色の経歴を持つ学生である。前職では仕事に面白味を見いだせず、「自分が楽しく、好きなことで手に職をつけたい」という思いから退職した。もともと旧車を愛好しており、「独学でできる範囲には限界が見えてきていた。より学べる環境へ身を置きたかった」。そう語る彼の背中を押したのは純粋な探求心だった。二級自動車整備士の課程を修了し、現在はボデーへの知見をより深めたいと考え、車体整備科で学んでいる。

就職活動において渡邊さんは現在、ディーラーと専門工場の間で心が揺れ動いている。ディーラーが持つ華やかな魅力と、専門工場で得られるであろう泥臭くも深い技術力の両方に惹かれている。「自身の中で拮抗している。もう一步後押しがほしい」というのが率直な本音だ。

一方で、働く環境に対しては非常に明確な基準を持っている。1つは、冷暖房などの空調設備が整っていること。もう1つは、工具や設備の5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）が行き届いていることである。「最新工場である必要はない。然るべき場所に然るべきものがあり、終わったあとに清掃する。そうした環境で業務に専念したい」。仕事の流れが途切れないようなところで働きたいという言葉には雑念なく業務に従事し、技術力を向上させたいという強い意志が込められている。

給与面については、「生活のため最低限以上は必要だが、求める金額に達していなくても自分がやりたい仕事であれば削ってもいい」と言い切る。渡邊さんの言葉には、現代の若者が企業に求める「自己実現」と「成長できる環境」のリアルな輪郭が等身大の言葉で表れている。